独り剣を撫して虎穴に入らん
―日露戦役をインテリジェンスはどう支えたか―

細野 哲弘
独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
（元 特許庁長官　元資源エネルギー庁長官）

「インテリジェンス」という言葉は、「知性・理解力」という意味よりは「情報・諜報、国際認識力」という安全保障に絡む意味で、最近よく目にし、耳にするようになった。もとより、加工されていない事実のかたまりのような情報ではなく、「何に使うか、どう役立てるか」を意識した合目的的な情報が重要であり、それを収集・追求することも含めて、「インテリジェンス」又は「インテリジェンス活動」という。素人的には、ともすれば機微な情報を非公式に徴求して活動する「スパイ大作戦」や「隠密同心」のようなオドロオドロしい趣[1]を連想する言葉であるが、本稿では日露戦役を控えて、異色であり、どことなく「おおらか」でありながら、その本来の趣旨に即して国運を導いた明治のインテリジェンスの一端について書いてみたい。

当時「日本人で最初にジャーナリズムの世界的寵児となった」とされた男がいる。1892-3年（明治25-26年）、マイナス50度にもなる冬季極寒のシベリアを単騎横断したとして、我が国はもちろん、欧州でも驚嘆を込めた絶賛の的になった福島安正陸軍少佐である。彼はそれまで任地であったベルリンからの帰国の途を、なんと単騎での陸路に定め、厳しい冬の時期を選んで出発したのである。当時のジャーナリズムでの扱い[2]は、一般市民にも受ける「冒険家としての快挙」であり、彼がのちに取材に

福島安正像（「福島安正の単騎シベリア横断 上下」の口絵から）

応じて語っているように、「当時、我が国のことを不平等条約を解消できないでいる四等国と見做し、また我が国民を体力、能力ともに遜色のある極東の劣等民族だとする、欧州の傲慢かつ不見識な差別認識を正し、わが国民の真価・神髄を分からせるために企てた。」というのは嘘ではなかろう。記事の大宗も、「ロシアを含む欧州のいかなる頑強な人物でも到底発想しない旅程であり、それを成し遂げた偉丈夫の勇気・胆力と体力に刮目する」とするものであった。しかし、当然ながら、微妙な国際情勢の時期に帝国軍人がロシアを縦断して歩き回ることが、そんなナイーブな動機に基づくだけのものと思わない向きも当然にあった。特に、ロシア側の公安当局の警

1)「スパイ大作戦」は、60年代後半に日米で放映された諜報番組。その司令の最後には、「例によって、君、もしくは君のメンバーが捕えられ、あるいは殺されても、当局は一切関知しないからそのつもりで。なお、このテープは自動的に消滅する。」とのメッセージが入り、指令を伝えるテープなどが瞬時に消滅する趣向が話題を呼んだ。また、70年代に日本で「大江戸捜査網」として放映された番組では、「我が命我がものと思わず　武門の儀、あくまで陰にて己の器量伏し、ご下命いかにしても果たすべし　なお死して屍（しかばね）を拾う者なし。」という「隠密同心　心得の条」が、番組タイトルに重ねて禍々（まがまが）しく流れ、似たような悲壮なミッションぶりを強調していたのを思い出す。

2) 我が国での報道は、通信の都合で何カ月も遅れてのキャリーであったにもかかわらず、その壮挙ぶりは国民を熱狂させた。しかし、行路がシベリアの機微なところに進むにつれ、軍部から報道の差し止めが掛かり、後半部分の報道は蒙古のクーロン到達あたりまで待たねばならなかった。

戒心には尋常ならぬものがあった。

手元に「福島安正の単騎シベリア横断　上下（島貫重節著・昭和54年刊）」[3]という書物がある。以下の記述の幾つかをこれに負っているが、この本は彼の冒険を克明に記すだけでなく、当時の時代背景などにも多くの誌面を割いている。その意味で、彼の道程を追いつつ、彼の人物像、使命を探るには格好である。

福島は、1852年（嘉永5年）信州松本藩士の長男として生まれている。若い頃から語学に優れ、最初は翻訳担当として司法省に出仕（13等）し、米国出張などをこなしている。のちに台湾治政の関係で語学の出来る者を募る陸軍省の公募に応じ、11等出仕に格上げされて転籍。陸軍中尉に任官し、伝令使として参謀本部に勤務するようになるうち、当初山縣有朋、川上操六に、のちに児玉源太郎に見込まれたことが彼の運命を決めた。薩長出身者が幅を利かせる軍部にあっても、参謀本部だけは川上の「実力本位・出身不問」の方針が徹底され、その下での情報重視の人材登用に見事に合致したのが、彼の語学力と国際センスであった。

彼は、本稿のシベリア横断が偵察活動の白眉であるが、それに先立つ1879年（明治12年）7月から5カ月かけて、北支、内蒙古の探索を行っている。これは彼の情報将校としての第一歩であるとともに、早速に第一級の評価を獲得する飛躍台でもあった。探索には、ロシアの外蒙古からの南下計画を睨み、山海関を通らない満州—北支の最短ルートの確認、内蒙古と河北省の境の民族問題の調査、蒙古人の対日感情の調査が含まれていた。中国人に身を窶し、ときに苦力に、あるときは薬商人に変装して集めた情報は克明な報告書[4]に纏められ、これを通読した山縣参謀本部長、川上同次長を唸らせた。

彼らを唸らせたのは、その内容もさることながら、「情報の価値は先行性にあり。一時的な断面の情報より長期にわたる変化を調査して、将来に対する予想を至当に判断し、さらにこの判断に従って対処できる余裕があってこそ、情報が生きた価値のあるものとして意味がある。」との福島の透徹した「情報マン魂」であった。

さて、いよいよベルリンを出る福島に話を戻す。

当時の記録によると、「1892年2月1日、愛馬凱旋号に乗って颯爽と出発。」となっている。騎乗による壮挙とあるから、騎兵と思いがちであるが、彼は歩兵科出身である。馬にはズブの素人であり、馬の選定・調達、乗りこなしも含め、イロハのイからの準備であった。実際に「現金1000マルク（邦価300円[5]）しかないが、どんな馬が買えるか」と愚直にも初見の馬商人の店に駆け込むようなことをしている。幸い、その商人は独陸軍の予備役騎兵中佐であり、福島の意図を聞くや大いに感激し、然るべき馬を格安で周旋してくれた。福島は、にわかに乗馬法、飼育法を習得し、防寒対策などして、上記の出発日を迎えている。尤も、凱旋号は馬高が162cmあって彼の体格にはやや高めで、のちにトラブルの原因になるのであるが、ともかくも勇躍たる門出であった。

なお、以前にも「シベリア横断」を成した日本人は存在する。例えば、露ペテルベルクの初代公使であった榎本武揚も、1878年（明治11年）の帰任に際して、68日かけてそれを成している。しかし、従者同伴のしかもかなりの行程を馬車、汽船、列車に依るものであった。福島が敢えて騎乗による踏破を選んだのは、市井の草の根情報を「身の丈」で機動的かつきめ細かく得んがためであった。「身の丈」でというのは、道々ツテを頼りながらほとんど初対面の人々と会い、歩き回って、自らの五感を頼りに事情を掴みとるということである。彼については、先に語学の素養に長けていたと述べたが、実に5か国の外国語（英、仏、独、露、中）を操れた。また、

3) 類似の著作に、「福島安正（豊田穣著・平成5年）」というのもある。島貫本の引用をしつつ、適当なまとめ、解説がされていて参考になったが、此処では島貫本をベースにした。

4) 北支、内蒙古のの調査結果は「隣邦兵備略」全64巻に纏められた。更に、1882年（明治15年）榎本武揚中国公使の下で臨時の公使館付き武官となった福島は、兵部衙門（陸軍省）の将校に取り入り、清の軍制、兵力配備、戦略などを聞き出すことに成功した。その成果は「清国兵制類集」全65巻に纏められ、「隣邦兵備略」と並ぶ対清対策の名著とされた。

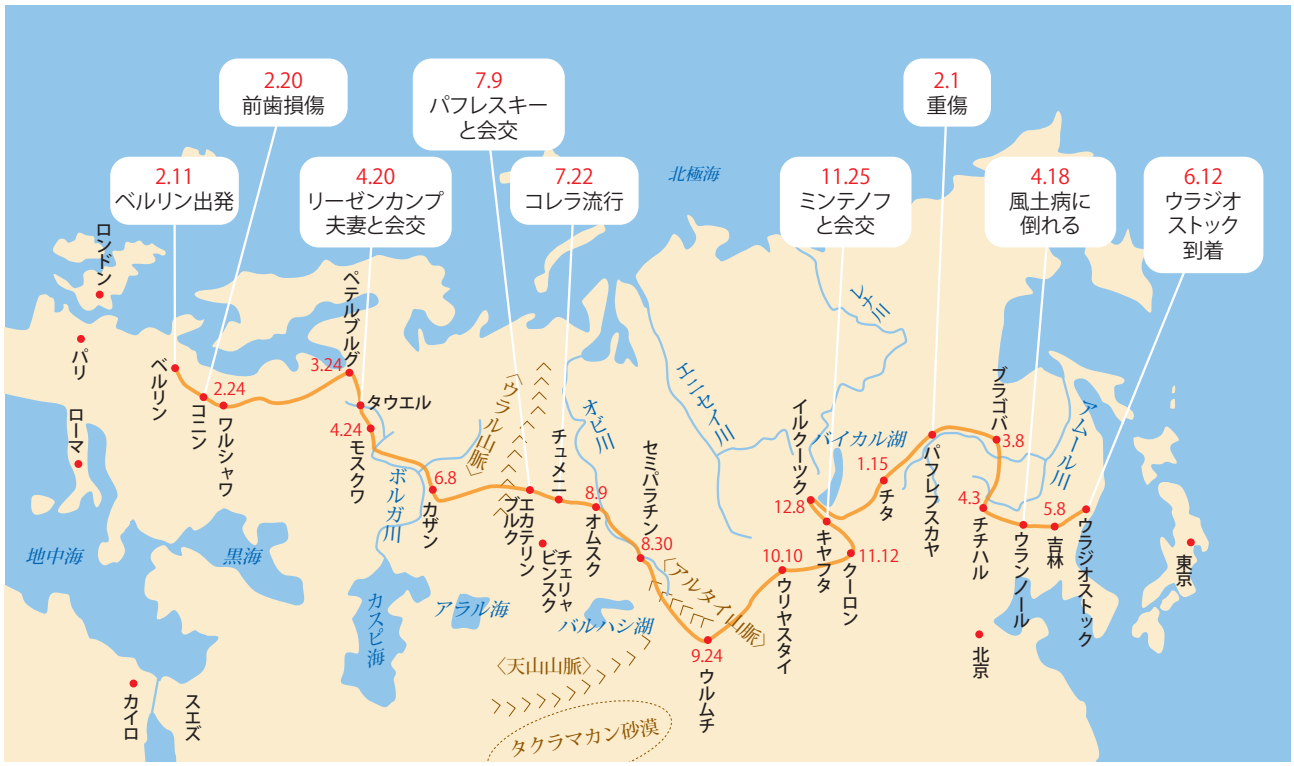
5) 当時の貨幣価値を現代の価値に引き直すのは難しい面があるが、物価の単純比較だと、当時の300円は今の120万円ほど。但し、当時の大工手間賃、初任給など実体的な庶民感覚をも加味すると、5-600万円に相当するとする計算も可能である。

言葉に加え、人情の機微にも容易に入り込める明るく細やかな性格や、地図を見ることと天文学が好きという素養は、彼の大きな武器であった。

彼は出発二週間ほどでポーランドのワルシャワに入り、以降、ペテルブルク、モスクワからウラル山脈を越え、チュメニ、オムスクを経て、アルタイ山脈を抜けて外蒙古に入っている。クーロンから再びロシア領内に戻り、イルクーツク、チタを経て満州のチチハル、吉林に至り、ウラジオストックを目指している。その旅程を時間を追って具に紹介することは本稿の趣旨ではない。 ご関心の向きは、掲載した地図を眺め、上記島貫本を参照して頂くことにして、ここでは、その探訪活動で分かった諸事情とその意義などをテーマごとにまとめて紹介したい。

まず最初は、シベリア横断の目的についてである。明治の国運を掛けた二大戦役である日清戦争と日露戦争との間には10年ほどの期間しかない。我が国は、日清戦争後の下関条約によって獲得した遼東半島の権益を、独露仏による所謂「三国干渉」によって放棄させられたため、「臥薪嘗胆」をスローガンに、捲土重来でロシアへの備えを始めたとする印象がある。しかし、清国、ロシアを対象にする対外戦略の準備は時期的にもかなり重なったところがあり、二面作戦でロシア対策は相当早い段階から進められていた。尤も、比較的早くから交流もあり、状況分析も先行できた中国（清国）に比べて、帝政ロシアについては、政治社会の内情、陸海軍の実力のほどは未知数の部分が多かった。特にポーランドはじめヨーロッパでのロシアの侵略の事実は知っていても、欧州戦線への兵力の貼り付けとの絡みで、その鋒先を極東に向けるのは可能か、もし向けられるとすれば時期はいつになるのかという点については、不透明の度合いが大きかった。

当時のロシア陸軍は、総員で日本の14倍、騎兵に至っては52倍という実力であると評価されていた。 しかしながら、まさに福島の横断諜報で明確に裏付けられることとなるのだが、当時ロシアには極東に常備するまとまった兵力の余裕がなく、仮に極東で戦争を構えるとすると、状況を見て西部からの精鋭部隊と物資の輸送によるしかないのではないかと推定されていた。そして、その場合の極東地域へのロシア兵員・物資輸送の規模とスピードを決する決め手になるのが、シベリア鉄道の敷設計画であることは衆目の一致するところであった。福島のシベリア横断は、その準備、進捗状況を探り、稼働可能



シベリア横断図（1892年―93年）

となる時期の見極めをすることに主眼があった。福島の陸路単独横断の企ては、その一環で明確な参謀本部からの指示・承認の下になされている。

話が前後するが、シベリア鉄道の建設計画は公式に発表され、1891年には工事が始まっている。そのウラジオストックでの起工式にニコライ皇太子が出席し、その折日本を訪問するという行事まであった。福島がシベリア横断の旅行申請をして、正式な認可を待つ間の出来事であった。認可まで時間を要したのは、破天荒な申請の決裁が難航したせいもあるが、まさにこの皇太子訪日時に、かの「大津事件[6)]」が勃発し、政府・陸軍首脳はその対応に忙殺されていたからである。

1892年、決裁を得て満を持して諜報旅行に出た福島は、さすがに警備の厚い鉄道建設地区に直接出没して刺激するようなことは巧みに避けながら、周辺情報を探っている。探査活動の結果、欧州側の新規敷設起点であるチェリアビンスク（モスクワ東方1400km）からの工事の進捗、極東側の拠点ウラジオストックからの工事状況[7)]、更には途中の地形、高低差、河川に架ける橋の構造、作業の季節的制約などを勘案して、これが輸送網として日本の脅威になるまでには「10年は掛かる」という見立てをしている。

次に、欧州政治情勢、ロシア国内の実情の把握についてである。先に「おおらか」なインテリジェンス活動と書いた。諜報活動には似つかわしくない表現であるが、彼の行跡を見るに、厳しい中にも、おっとりした当時の時代性を感じるし、ロシアの対日驕慢（おごり）に助けられた面もあっただろうが、福島の人柄（ひととなり）・素質をもってして初めて生きた情報として感知できた面が大きいと感じる。外交官の帰国途上とはいえ、国内行脚（あんぎゃ）には当局の許可が必要であり、地域によって濃淡はあるものの、ロシア側の治安担当により彼の行動は十分にマーク・監視されていた。申請した主要中継地点では、たいがい州政府、官憲（管轄軍または警察）の出迎えがあり、歓迎会という名の事情聴取懇談がなされた。外出中に宿舎の荷物を秘かに検（あらた）められたり、街中で尾行されたことも再三であった。尤も、表向きは大国ロシアの鷹揚さを示すためか、然るべき筋からの「歓迎」はそれなりに丁重であった。要所要所で迎えてくれる官憲から提供される宿舎は快適・清潔であったし、君が代演奏で迎えられたこともあった。更に、あらんことか離宮滞在の皇帝アレキサンドル三世と皇后に拝謁の機会をすら用意されたこともあった。福島の偵察旅行の公然さもさることながら、対日攻略の鉄道建設起工のついでに訪日したロシア皇太子といい、仮想敵国の諜報将校と知って接見した皇帝といい、ちょっと普通なら考えにくい「おおらかさ」を感じる。

シベリア横断の写真（「福島安正の単騎シベリア横断　上下」の口絵から）　ペテルブルク滞在を終え、騎兵に見送られ帝都を出る福島。諜報偵察旅行という性格に鑑み途上の写真は稀であり、貴重なもののひとつ。福島はこの旅にカメラを持参していない。いざという時の証拠を残さないためである。なお、のちに述べる次の亜欧探索ではコダック社のカメラを携行した。

他方、然るべき街に入る前と出た後にはマークの

6) 大津事件とは、1891年シベリア鉄道のウラジオストックでの起工式のついでに、示威と偵察を兼ねて来日した露国ニコライ皇太子に、大津市で警備する津田三蔵巡査が斬り付けたという事件。傷は大事に至らず皇太子は鷹揚な態度で帰国したが、ロシアからの報復、関係悪化を恐れた政府首脳は津田を死刑に処するよう司法に圧力をかけるという事件が起きた。児島惟謙（こじまこれかた）大審院長が敢然とこれを拒否して、司法の独立を護ったとする有名な事件である。一方、ときの皇太子の内心は窺う術もないが、彼は日露戦争時には皇帝であり、講和交渉に当たり「ロシアは負けていない。ロシア領土の寸土、1コペイカの賠償金といえども日本に渡すのは認めない」と強硬論を主張した。

7) この時のシベリア鉄道の工事進捗は、西はチェリアビンスクから始めてクルガンに達し、東はウラジオストックを起点にニコリスクを北上しハバロフスクに向かわんとしていた。未完成の路線はこの時点で約7000キロ。地形の難易度などを勘案して、西部からは400キロ、東部からは300キロが毎年の進捗可能敷設量と見通した。結果、この予想はほぼその通りとなった。なお、余談であるが、シベリア鉄道は欧州のそれよりも広軌の設計である。ナポレオンのような征服者が現れたときに、輜重（れっしゃ）が続きで乗り入れられないようにする意図を秘めたという説がある。

手が及んでおらず[8]、南京虫だらけの田舎宿、農夫の家での滞在など自力独行での旅程ならではの苦労はあったものの、得意の語学を駆使してナロード（民衆）に分け入り、直に民情に触れる貴重な経験を積み重ねている。一般の民衆、農奴たちの苦難と鬱積した不満、そして複雑に反政府活動を構築する内外の組織の動きを垣間見た。

とりわけ、ベルリンから最初に入ったポーランドは、長きに亘りロシア、ドイツ、オーストリア三国によって植民地の苦難を強いられ、これに耐えてきた国であった。それだけに、独立活動家、革命家の秘密結社が多数存在した。国内で地下活動をするとともに、革命資金、武器、通信機材の調達のために、周辺各国に秘密の拠点を置き、外国勢力とも結託して積極的な諜報活動、抵抗活動を展開していた。福島は、ポーランド国民の心情に触れるとともに、こうしたマグマをうまく使うとロシア帝国の足元を揺るがすことが出来るとの心証を深めた。こうした撹乱工作のエース的存在が明石元二郎（あかしもとじろう）であるが、本稿での主人公ではないので敢えて深追いはしない[9]。福島は、ポーランド内外の反ロシア勢力との交流を経て、その繋がりでその後のシベリア横断のルート選定や寄宿先には、ポーランド所縁（ゆかり）の運動家の所在地に頼ることが多かった。

一方、各地でロシア陸軍の華とも言うべきコザック騎兵の連隊と度々行き会った。その厚誼に癒されるとともに、コザック騎兵の素晴らしく訓練された規律、士気の高さ、コザック馬の惚（ほ）れ惚（ぼ）れするような身体能力に接した彼は、そのレベルの高さに驚嘆し、我が国の騎兵・歩兵ではこれら部隊には伍し難いのではないかとの感想を抱いた。こうした実感は、のちの日露陸戦において、秋山好古が騎兵を馬から降ろして機関銃で対応させるという作戦判断をしたことに通底する。

また、先に「ツテを辿って」とも書いた。異国の初めての土地で、「ツテ」もなかろうと思われがちだが、彼の旅程を追うと、二つの「ツテ」の存在が窺（うかが）い知れる。即ち、諜報は何もないところには成り立たないという意味で福島が出発する前に密やかに張られていた情報網の存在、そしてまさに彼が動きながら「自ら紡いだ繋がり」である。

前者については、上記のポーランド人脈とそれに連なるイギリス、ドイツ、フランス、スイス、フィンランドなどの諜報網との繋がりの確保、現地人の協力者の開拓、さては「娘子軍（じょしぐん）[10]」との連携などであるが、各国公館付き武官や民間人に扮した情報員などの手によって少しずつなされていた。

後者については、例えば、タウエルというボルガ川河畔の街の騎兵連隊に寄宿し、レーゼンカンプ連隊長夫妻と懇談した折、フランス語の堪能な同夫人からその実父であるパクレフスキーという財界人の紹介を受けたことなどがよい例である。バクレフスキーは元ポーランド貴族で、独立義勇軍を率いてロ

8) ロシア側にそのチェックが甘いと言うのは酷であろう。地元民でも尻込みする厳寒の荒地彷徨を、まともに逐次追跡する意味を認めていなかっただろうし、仮に遭難してもロシア側には痛痒ないどころか内心幸いであったろう。また、ロシア側はニコライ皇太子（のちの皇帝）の「黄色い小猿」との蔑視表現に代表されるように「日本人は所詮大したことない」との見下しの思い込みが強かったのも事実。

9) この稿で明石元二郎（当時大佐、のちに陸軍大将）をどう扱うかを随分迷った。この時期の日露のインテリジェンスと言えば、まず彼を思い浮かべる向きは多いと思う。北欧、ポーランドの活動家、レーニンを含む国内反政府勢力を裏から支援し、ロシア帝政を揺るがした文字通りの辣腕フィクサーぶりは、多くの著作で喧伝されている通りである。多額の工作資金の運用、武器の周旋のための大胆な策動、煽動工作など、ある意味最もインテリジェンスっぽい印象がある。のちに、内外から「明石の活躍は陸軍10個師団に相当する。」とも「明石一人で、満州の日本軍20万人に匹敵する戦果を上げた。」との評価を受けたのも事実。しかし、色々文献を漁った結果、ロシア革命に対してはともかく、少なくとも日露戦役については、その工作が果たして何処にどれくらい結実したかについて、個人的に十分な実感を得られなかった。勿論その貢献を否定するつもりはなく、むしろ日本人離れした彼のダイナミックな行動力に脱帽する思いである。しかし、なかなか直接的な効果を云々できないのなら、迂遠であり地道なせいであまり人口に膾炙（じんこうにかいしゃ）されてないけれど、ジンワリと効いてくる諜報活動にスポットライトを当てることも面白かろうと思い、この稿を紡いでいる。

明石元二郎像
（ウィキペディアより）

10)「娘子軍」というのは、わかりやすく言うと女子スパイのことである。貧しさゆえに売られて大陸に渡り、ロシア人家庭の女中や「夜の接待業」に就いていた彼女らは、シベリア鉄道の工事に係わる現場の工夫（こうふ）、ロシア軍の兵士、幹部、将軍らから、軍事、工事進捗の生の情報を聞き出すに無視できない貢献をしたとされる。その極めつけは、その美貌を武器にロシア軍満州総督のアレキセイエフ大公の妾に収まった「お浜」という女性。大公のもとから機密の地図を入手する手柄を挙げている。これらの情報の受け渡しにもネットワークが必要であり、例えば「清水松月」という名の僧侶に成りすました花田沖之助大尉（のちに中佐）などが活躍したとされるが、この辺りはいかんせん傍証不足で詳細不明である。

シア軍と相対したが、武運拙く敗れてシベリア流刑とされ20年間服役させられたものの、釈放後不屈の精神で酒屋チェーンを興こして財を成した。勿論、独立軍への支援意欲は変わらず、福島の意図にも共鳴して、発出してくれたシベリア各地に及ぶ支店・ネットワークへの紹介状[11]は、独行福島の力強い後ろ盾となった。また、ロシア人にあってもポーランドシンパは少なくなく、エカテリンブルクでの福島とバクレフスキーとの最初の邂逅は、街の治安当局であるはずの警務部長のロシア貴族が周旋した。

山脈を越え、川を渡り、着々と探索の旅は続き、収穫も多いのであるが、道中の苦難は並大抵ではなかった。生身の人間福島の苦闘にも、簡単に触れておきたい。先に、購入した凱旋号の馬高が高すぎたと記した。これは頻繁に馬の蹄鉄に挟まる氷塊を取り除くとともに、荷の上げ下げをするため乗り降りをするに、消耗をきたす原因になった。また、独露国境を越えてすぐのコニン（現ポーランド・コニン郡）の街では、歓迎の太鼓の音に驚いて棒立ちに伸び上がった凱旋号をとっさに制御できずに、馬の首に顔をぶつけ前歯を折る羽目にもなった。寒さだけでなく、砂塵に苦しみ、疫病にも遭遇した。ペレムで発生したコレラは、雪解けとともに猛烈な勢いで拡がり、チュメニでは、探索もそこそこに次の目的地に逃げ出さざるを得なかった。

福島は少なくとも道中二度の重篤を経験している。アムール河近くのパクレフスカヤという村では、馬に乗ろうとして、装具の重さのため乗りきらないうちに馬が駆け出し、鞍がずり落ち、福島は氷上に転落。その際、氷塊の角に頭部を強打し、大出血して失神するという事故に見舞われた。幸いコザック騎兵に助けられ、近くの農夫が呼んでくれた看護士の薬剤、手当てのおかげで、化膿を免れ大事には至らなかったが、頭痛、目眩が引くまで付近の農家で長く安静を強いられた。さらに、吉林を間近にしたウランノールという村では、「有火」という風土病に冒され、四十度近い熱に浮かされた。農夫に手配してもらった医者の手当も奏功せず、昏睡の18日間を含め、実に約1ヶ月を田舎の宿で過ごすはめになった。世話になった農家、看護士などには、費用を遥かに上回る金子を渡して礼を尽くした。

アルタイ山踏破の図（「福島安正の単騎シベリア横断　上下」より）　これは1892年11月に出た写真画報に掲載されたもので、当然想像画であるが、当時の光景をよく表しているとして、全国に報道された。

携帯する食糧も、決して十分なものではなかった。当然、道中で調達するのを原則としたが、沿道には人家もまばらで、何日にも亘り限られた手持ち食料だけで凌ぐことは日常茶飯であった。彼の体力を支えたのは、鶏卵、パン、お茶であった。特に、鶏卵は毎日30個（！）、お茶は20gを費消した。さすがに、馬の飼葉を持ち歩くわけにはいかず、所々で世話になった軍施設はまさに馬たちにとってもオアシスであった。

さて、苦難にめげず福島の旅はウラジオストックに向けて近づいていくのであるが、ウラジオストック到着前に当時の国際情勢を振り返っておこう。

列強の中国浸食は帝国主義そのものであった。ロシアは、三国干渉を主唱したと清国に恩を着せ、旅順・大連の租借だけでなく、ハルピン経由でウラジオストックまでの鉄道敷設を認めさせた。これと競うように、ドイツは膠州湾租借、山東鉄道敷設、鉱山開発権を獲得。フランスも広州湾一帯の租借を、イギリスも九龍半島、威海衛を租借

11）福島はイルクーツクの手前のキャフタという町でミンチノフというロシア豪商に迎えられ、情報入手を含め世話になっている。これもバクレフスキーからの紹介になるものである。

した。いわば、北から、満州、長城以北はロシア、山東省はドイツ、揚子江流域はイギリス、広東など南西諸省はフランスが、それぞれ蚕食した訳である。こうした中で、ロシアの南進活動は際立ち、満州を超え朝鮮へも軍事、内政の介入を強め、欧州側の備えとしては露仏同盟を締結している。

欧州では、それと前後して独墺伊三国同盟が結ばれ、そんな状況下、イギリスは極東での権益確保、ロシアの南進阻止、大艦隊の建設に着手したドイツ海軍への牽制のために、それまでの「名誉ある孤立」方針の是非を考え直す機運が高まった。なお、相前後するが、我が国でも伊藤博文らが日露協商を模索する動きを始めており、軍事力で存在感を示した日本がここでロシアと結ぶようなことは、イギリスから見ると最悪のシナリオであった。

1893年6月12日、福島は、遂に1年4カ月、シベリア14000kmを踏破する探偵旅程を終え、ウラジオストックから帰国の途に就いた。元山、釜山を経由し、長崎などに寄港のあと、横浜港に到着。児玉源太郎陸軍次官、家族の出迎えを受け、同地で勲三等旭日重光章を授与された。更に、新橋駅からは四頭馬車にて皇居に案内され、擦り切れた旅装に頂いたばかりの勲章をつけて、陛下に拝謁の栄を賜っている。そのあと上野での歓迎集会に臨んでいる。

福島のシベリア横断の克明な記録は報告書[12]に纏められ、戦争設計の重要な機密情報となった。

しかし、それとは別にもう一つ重要な上申がなされている。山縣有朋枢密院議長、川上操六参謀本部次長に極秘で伝えられたとされている。その上申に曰く、「（仮想敵国の）ロシアは広大であるだけでなく、歴史的に欧州各国とは因縁が深く、どんな形の連合ができるかは予断できない。（1893年時点の認識で）今後10年にしてシベリア鉄道が完成し、ロシアは大軍を極東に派遣可能となる。この10年が我が国にとって極めて重要な猶予期間であるが、それを目標にする限り、（鉄道建設遅延の策はとるにせよ）既に列強がロシア国内に長年に亘って張り巡らしているインテリジェンス網に伍して、我が国単独で情報と活動の策動を割り込ませていくには限界がある。速やかに、英、仏、独のいずれかを味方にして協同する方策を探ることが絶対の急務である。」と。

これは実に重要な示唆である。来るべき日露戦役が総力戦になるであろうことを想定したとき、その一翼を担うべき我が国のインテリジェンスは残念ながら「追っつかない」、他国との連携、協同あるべしとする献策である。

此処から直ちに「日英同盟」に至るとするのは飛躍が過ぎる。この同盟は、もっと大きな諸々の要素が加わっての外交判断であった。福島はシベリア横断の後わずか3年ののち、即ち1895年から538日を掛けて、改めて中央アジア、インドシナ、インドに至る次なる諜報旅行[13]に出掛けている。その意図を考えるにつけ、この時期は、我が国にとっては、カツカツの我が国力の限界に照らし、軍事、外交での他国との共同の必要性を真剣に考慮する重要な時期であった。すなわち、福島らの情報活動は、イギリスのおかれた位置、同国にとって懸念すべき国際課題の把握も含め、各地域での列強の思惑、機微を改めて浮き彫りにしたのである。

一方、通商国家であるイギリスにとっては、本来極東は平和が望ましく、自分から特定国に肩入れし、この地域の力関係を動かすのは本意ではなかった。

12）報告書の冒頭は、右の写真のとおりであるが、彼は漢詩を得意とし道中で詠んだ400首以上の漢詩のうち200余首を「征旅詩集」として別途本にしている。だが、そこに載らなかった句の方が重要。例えば、次のような句は句としてはともかく、重要な情報メモになっている。中国人以外には判読不明な文字を使っていざという場合の備えにしていたと思われる。

拂暁一鞭露都を発す　南の方摩府（モスクワ）に向かえば馬鬣（たてがみ）を振るう
茫々たる眼界、人煙稀にして　沿道過ぐる処、皆寒邑なり
（首都ペテルブルグからモスクワに至る幹線道路ですら人家の煙突から出る炊事や暖房の煙は少なく、殺風景な有様は農民たちの疲弊した様子が表れている。）

13）この第二の亜欧偵察旅行は、上海、香港から中近東に入り、カイロ、ベイルート、コンスタンチノープル、コロンボ、ラングーン、カルカッタ、カラチ、ボンベイを経て、テヘラン、コーカサス、タシケント、シンガポール、バンコク、ハノイにまで至るものであった。今度は亜熱帯、熱帯、乾燥、砂漠の地を回るもので、すっかり有名になってしまった福島へのマークも心配されたが、列強各国の諜報機関がしのぎを削る地での情報員との接触、情報収集は、かけがえのない各国事情、状況判断のネタをもたらした。

シベリア遠征報告書（冒頭）
（「福島安正の単騎シベリア横断 上下」より）

また東トルキスタン、チベットからペルシャ湾、バルカンに至るまで鍔迫り合いが続くロシアとは、ここで事を構えることは得策ではなかったし、フランスとも対立は望むところではなかった。しかし、英国海軍に挑まんとするドイツ・ウィルヘルム2世の大建艦政策、ロシア皇帝の飽くなき南下策動に直面し、大国ながら自力で従来どおりの秩序維持をする困難を自覚せざるを得なかった。対中国については、最も多く利権を有しながら、義和団事件やその後のロシア軍の北清居座りに直面し、この地域での自国の戦力展開が十分でないことが明らかになってしまった。ボーア戦争での意外な苦戦による配備余力のなさも、それに拍車をかけた。日清戦争、義和団事件で示された日本の軍事的実力や、他国とのパワーバランスを冷静に考えたとき、イギリスにとっても日本との共同は意義あるものとする感覚は現実味を帯びていった。

即ち、日清戦争前後から1900年頃までの時期は、日英双方にとってお互いの接近の伏線を紡いでいく過程であったのである。

日英同盟の締結は1902年1月である。そして5月、東京で日英軍事協商の秘密会議が開かれている。日本からは、山本権兵衛海相、伊東祐亮海軍軍令部長、斎藤実海軍総務局長とともに、陸軍参謀本部から田村恰与造次長、そして第二部次長に就いていた福島安正が出席して折衝に当たっている。

この日英同盟及び軍事協商によって我が国が受けた恩恵は、計り知れないものがある。「日英いずれかが一国と交戦したときは同盟国は中立を守り、二国以上の場合は参戦する義務を有する」とする条項は、露仏同盟に対しフランスの日露戦争関与の歯止めになった。また、イギリスからは、アルゼンチンが発注しイタリアで建造中の最新巡洋艦2隻の日本への周旋、そしてその日本までの曳航護衛などの便宜を受けたほか、陰に陽に諸々の方途でバルチック艦隊を牽制して、その東洋回航を遅らせる等のメリットを受けた。

しかし、この二国間同盟、協商のハイライトはインテリジェンス共闘にあった。お互いの諜報活動の成果を共有するとともに、その手段として情報通信インフラの整備を急ぎ、通信のプロトコール、暗号を共同化した。日本からの電信は、東京から九州を経て台湾、福建省に至り、イギリス支配の香港を経由してボルネオ、マラッカを過ぎインド洋から紅海、地中海を抜けロンドンに伝わった[14]。イギリスが入手したインドからのロシア情報は、このルートでロンドンに伝えられ、在ロンドンの日本公使館駐在武官に提供された。明石工作の暗号電報もこのルートで伝達された[15]。

日英の同盟関係樹立への貢献という意味では、義和団事件における柴五郎中佐[16]の活躍にも触れておかねばならない。義和団事件というのは、1900年、義和拳という武術を修めると鉄砲にも負けないという迷信的な秘密結社「義和団」が、「扶清滅洋」を合言葉に山東省で起こした外国排斥運動である。鉄道、電線などの西洋的なものを破壊し、キリスト教徒を殺害しながら、最後は渡りに船とばかりに同調した清の正規軍と一緒になって、外国公館のある北京城を包囲した。包囲された外交団は4千名ほど。そのうち公使館付きの軍人、兵士は500人に過ぎなかった。

柴五郎像（ウィキペディアより）

「北京の55日」という映画にもなった各国外交団と逃げ込んだ北京市民の籠城戦は、日本を含む列強救援部隊がきわどいタイミングで到来して辛うじて籠城側が持ち堪え

14) 通信網の接続は、維新からまだ３０余年の我が国において、時勢を見極め、科学の粋を集め、先見的に見事な投資をした証左である。特に、九州から台湾経由の海底ケーブル回線網は、児玉源太郎の指導の下、海底測量、敷設、通信機の国産まですべて自力で達成。

15) 同盟の本質は、各国のバランスオブパワーと自国の国益である。従って、事情の変化によりそれは変質する。日英同盟も日露戦争後においては、様々な事情の変化により双方の利害に乖離が生じて、解消への経緯を辿るのであるが、ここでは日露戦争への意義という観点から日英同盟を評価する記述に留める。

16) 柴五郎は会津藩士の家に生まれ、幼年期の鶴ヶ城落城の当日、実家に居なかったことから、祖母、兄嫁、姉などが壮絶な自刃を遂げながら、自らは生き永らえた。斗南（となみ）の地で他の藩士たちと辛酸をなめ、上京した後も旧武士には似つかわしくないような下働きの境遇に耐え、漸くにして幼年学校合格を果たして軍人の道を歩んだ。その落涙を禁じ得ない苦難の前半生は、「ある明治人の遺書」という自伝に詳しい。彼も、情報将校であり、中国留学などを経たのち公使館付き武官となって義和団事件に遭遇することになったのだが、籠城しての攻防戦には、語学力とともにそれまでの北京市街事情調査の蓄積が大いにモノを言った。最終的には、情報将校としては珍しく、福島、明石同様に陸軍大将に補され、台湾軍司令官などを歴任している。

抜いたのであるが、抗戦の中心をなした日本公使館付き武官・柴五郎中佐の活躍は傑出したものであった。限られた敷地に、外交団だけでなく逃げ込んだ中国人クリスチャンをも収容し、少ない糧秣をシェアしつつ、多国籍で寡兵な守備隊を巧みに機能させた。その卓越した指揮ぶりと、戦闘中、収束後を問わず、一切の狼藉・軍令違反を許さない柴中佐の部隊の厳正な規律ぶりは、籠城した各国外交団、北京市民から絶賛の的となった。更に、その紳士的益荒男ぶりは、ロンドンタイムス特派員A.モリソンにより、イギリスで広く紹介され、ともすれば黄禍論で偏見のあった対日感情を劇的に好転させた。また、籠城抗戦外交団の一員であったイギリス公使マクドナルドは、柴と日本軍の規律の素晴らしさを目の当たりにし、帰国後ソールズベリー首相に献策するとともに、在イギリスの林公使とも連携し、日英同盟の強力なサポート論陣を張った。

なお、この時籠城軍救出のための日本から派遣された部隊は、少将に累進した福島安正が率いた[17]。

最後に、福島が苦楽を共にした乗馬についても付言しておきたい。凱旋の際の朝野の大歓迎については先に述べたが、福島は日を改め皇居での昼食会のお召しにも与っている。その折、苦労を伴にした乗馬3頭を連れ帰ったことを陛下が殊更嘉され、宮内省からの申し渡しで、馬たちは上野公園の動物園で静かな余生を送ることになった。ただ、日本の土を踏み、動物園に送られ大切にされたのは、凱旋号ではなかった。福島は、帰国までに10頭の馬を使役している。凱旋号は、よく難路行をこなしてきたが、ペテルブルグを過ぎた辺りから、跛行するようになり、遂にモスクワの先で動けなくなった。モスクワの獣医の診断は、蹄葉炎（蹄の根に出血する病）であった。療養すれば治るかもしれないが、時間を要するとのことであった。大義の任務遂行のため、忍び難い想いを振り切ってモスクワに凱旋号を残し、新しい馬に乗り替えている。二代目はウラル号と名付けられた。以後、8頭の馬が起用されて、福島を助けた[18]。

戦争の花形は前線で活躍する将軍・提督であり、参謀、兵站などはなかなか評価されにくいことは前稿でも触れたが、さらに作戦、動員の前提である諜報活動となると猶更である。日露戦争においては、合理性の高い諜報、分析に支えられた国際政治力学を見据えた他国との連携（日英同盟）、対外広報が奏功し、その勝利の最重要な要素となった。しかし、まさにその背景がインテリジェンス活動であったがゆえに、また戦争相手への情報流出を恐れて、自国民に対してもある種の「真相カモフラージュ」がなされたことにもより、一般国民は嚇々たる勝利は、「日本人特有の、死をも恐れぬ不屈の精神」にこそ基盤があると思い込んでしまった。これがのちに不条理な精神至上主義の跋扈を許し、それが宿痾となって国運を傾けることになるのは痛恨である。

他国への働きかけ、対外広報を含めた戦争設計については、後日別に稿を起こし改めて触れるつもりである。本稿では、ギリギリの国力で国を守り、世界に対して確固たる存在感を示した日露戦争勝利の背景には、合目的なインテリジェンス活動が立派に機能し、またその意義を理解しその成果を最大限受け入れて活用するという土壌が、当時の政治・軍部の上層部にはあったという事実は強調しておきたい。それがあってこそ、その任に当たる者も勇躍する。

福島は西園寺公望と強い信頼関係にあった。福島がドイツ勤務の際の公使が西園寺で、単なる上司、部下としてではなく危機管理、情報分析などにおいて強い一体感を共感したと言われている。

シベリア壮途に際して、西園寺が福島に贈った漢詩の一節、福島の覚悟の返句に曰く、

「遠く祖国を離れて思う憂国の情　独り剣を撫して虎穴に入らんと欲す。（西園寺）」

「日本男児の心中唯忠愛の至誠あるのみ　勇往邁進、斃れてのち己まん。（福島）」[19]

17）この時の日本の北京公使は西英二郎。外務大臣（松方内閣）をも経験した外交の大ベテランであったが、元々情報畑でペテルブルク勤務が長く、ロシア諜報の先駆者で、ベルリン勤務当時の福島とも親密な交流があった。救出に赴いた福島とは男泣きの再会であった。なお、彼の子息がロス・アンジェルス五輪大会での馬術金メダリスト西竹一中尉（男爵）である。太平洋戦争の硫黄島にて、それと知った米軍からの「バロン西、デテキナサイ」との投降勧告を莞爾と受け流し、部下と共に玉砕（戦車連隊長 大佐）。

18）この10頭のうち、命名されて福島を載せたものは6頭。福島と伴に日本の土を踏んだのは、アルタイ号、シンアン号、ウスリー号の3頭。

19）彼がシベリア横断に携行した武器は、軍刀一振り、拳銃一丁のみ。冬装束の外套、軍靴を着けた福島本人の他に馬に乗せられる荷物は40kgほどに過ぎず、携行品に制約があった。とはいえ、仮想敵国をこれだけの装備だけで渡り歩く諜報将校の覚悟が窺い知れる。